

まとめ

1. 共通テストへの CBT や IRT の導入について

- 本報告書においては、大規模でハイステークスな使われ方をしている試験である共通テストに CBT や IRT を導入する場合、どのような利点、優れた点（メリット）や課題があるかについて、論点ごとに整理した。
- 大学入学者選抜、とりわけ共通テストでは、単なる学力試験・調査等をはるかに超える実施水準が求められる。現に、これまでの共通1次やセンター試験は、ミスやトラブルが非常に少ない安定的な実施がなされてきており、この枠組みを引き継ぐ共通テストにおいても、このような安定的な実施が我が国の「試験文化」として期待されている。
- PBT で実施してきたセンター試験及び現行の共通テストの課題や CBT で実施した場合のメリットは大きいですが、現行の共通テストを CBT で行うこと、更には IRT に基づいて行うためには、第3章及び第4章で列挙した数々の課題を高いレベルで克服する必要がある。
- 具体的には、
 - ・全国的に均質で質の高い受験環境（パソコンやネットワーク等）の確保
 - ・トラブル等が生じた場合の対応体制の構築
 - ・新しい試験の在り方に対する受験者や保護者を含む社会全体の理解などについて、細やかな検討が必要と言える。

2. 今後求められる取組について

- これまで見てきたように、大規模でハイステークスな使われ方をしている共通テストを直ちに CBT 化することには、多くの課題があると言わざるを得ない。一方、小規模な試験、あるいは受験者や関係者に重大な結果をもたらすような使われ方をしないローステークスな試験としての活用であれば、CBT や IRT との親和性は高いと考えられる。
- また、本報告書は、大学入試センターの立場から、現行の共通テストへの CBT の導入を対象を絞ってまとめているが、本来的には単に PBT での実施を CBT での実施に切り替えることだけに焦点を当てるのは適切ではない。共通テストへの CBT の導入を検討する際には、今後次代を担う若い世代はもちろん、大学等での学び直しを希望する社会人を含む大学入学希望者に対して、どのような選抜を実現すべきなのか、その実現に CBT はどのように寄与するのか、という大局的な視点で、共通テストの性格や位置付けも含めて見直すことが必要と考える。

- これまで検討してきた CBT を導入していく上での課題, 長所や短所などを把握した上で, CBT の導入自体を目的化することなく, CBT を導入することの本来の意義を十分に引き出しながら, 受験者や保護者を含む社会全体が納得できる形を模索して, 国内外の最新の動向も踏まえつつ, 引き続き調査研究に取り組んでいくことが重要である。

※ 本報告書は令和3年3月時点の検討状況をまとめたものである。今後, 技術の進展や調査研究の進捗等に伴い, 内容に変更が生じる可能性がある。